

## 看護学生の対人関係能力の育成をめざした授業の教育効果

(コミュニケーション / 自尊感情 / 構成的グループ・エンカウンター)

長田京子・松尾典子・古賀美紀・土作幸恵

## Educational Effect of Nursing Student's Development in the Interpersonal Relations Course

(Communication / Self-Esteem / Structured Group Encounter)

Kyoko OSADA, Noriko MATSUO, Miki KOGA, Yukie TSUCHISAKU

看護者が他者を援助するための対人関係能力の育成は、看護学教育の重要な要素の一つである。本学科においては1年次前期にコミュニケーション論を開講し、看護者が援助専門家として他者を尊重して看護するためには、まず自分自身を尊敬・受容することが必要であるという立場から、構成的グループ・エンカウンターを活用したコミュニケーション演習を導入した。本研究では、コミュニケーション演習の授業評価を行い、教育の効果と課題を検討することを目的に、履修学生46名を対象に調査を実施した。その結果、演習後に自尊感情の向上が認められ ( $p < 0.01$ )、演習の教育効果とともに課題が明らかになった。

### はじめに

看護者の対人関係能力、即ち「他者を自己とは異なる存在にとらえ、他者の思考・感情・意志・価値観などを尊重しながら援助関係を形成していく」という能力は、看護実践に直接反映するものであり、看護者にとって必要かつ重要な要素である。看護学教育においても対人関係能力の育成をめざすことは意義深く、時代の変遷や専門領域を問わず、基本的な課題の一つである。特に、人間の価値観や生き方が多様化し、人間関係が希薄になりがちな今日にあって、教育の課題は大きいといえよう。

このような背景に鑑み、本学科では、「人間は一人ひとり異なる存在であり、個人は尊重される」という立場に立ち、コミュニケーション論を開講している。この授業では、看護学を学びはじめたばかりの1年生が対象であることをふまえ、「他者を理解するには、自己を理解することから」という基本理念のもとに、理論編ではカウンセリング理論の一つである交流分析理論を講義し、演習編では平成12年度から構成的グループ・エンカウンターを活用した体験学習を導入した。特に

演習編では、「自己をありのまま理解すること・自己を尊重し受け入れること」について、グループメンバー間の相互作用を通して、学生が実感を伴って理解することをめざしている。

グループ・エンカウンターとは、自己実現をめざして小集団で行われる集中的グループ体験の一つで、エンカウンターとは出会うこと（参加者間の本音と本音の交流）を意味している。我が国の看護教育においては、1970~1980年代より演習や合宿の形で行われはじめ<sup>1)2)</sup>、近年では、臨床看護学実習と並行して実施され、学生の受持ち患者への看護体験をもとに学習が深められたという報告がある<sup>3)~6)</sup>。グループ・エンカウンターの方法は幾つかあるが、本演習で構成的グループ・エンカウンターを活用した理由は、その目的が健康者の潜在能力の開発という教育的要素をもっていて青年向きであり<sup>7)8)</sup>、また、一人の教官が90分の授業時間の中で学生の心理的安全を確保しながら実施できるという現実的な条件を満たせるからである。

本学科におけるコミュニケーション論の特徴は、基礎科目の位置付けで看護学の教官が担当する点であるが、入学間もない1年生に行われた構成的グループ・エンカウンターに関する報告は少ない。ややもすれば知識中心的で受動的な学習経験をしてきた新入学生に

とって、自己や他者をありのままに理解・受容する態度や、対人関係能力の開発に関する学習は、新しい学習経験であり、時には戸惑いも生じるのではないだろうか。

そこで本研究は、1年生に構成的グループ・エンカウンターを活用したコミュニケーション演習の評価を行い、その教育効果と課題を検討することを目的とする。

#### [用語の定義]

自尊感情：自己の価値と能力について、どのように感じているかという感覚・感情である。

自己受容：自己に対する評価あるいは態度であり、自尊感情とは独立して、自己のありのままの姿をそのまま受け入れることである。

構成的グループ・エンカウンター：自己の生き方を検討すること、即ち、自己・思考・感情・行動を意識化することをめざし、リーダーが準備したエクササイズ（課題）で作業や検討を行い、終了後に参加者でシェアリング（分かち合い）を行うというプログラムで構成される<sup>9)</sup>。

## 方 法

### 1. 対象

対象は、コミュニケーション論を選択履修した看護学科1年生のうち、授業前後ともに調査への協力が得られた46名（回収率95.8%）である。平均年齢は18.6才（SD= 2.35才）で、性別は女性が43名（93.5%）男性が3名（6.5%）であった。

### 2. 授業展開

コミュニケーション論は45時間で1年次前期に開講され、看護学の教官が講義と演習を分担して実施している。学習の目標は「自己理解を深めるとともに、コミュニケーションの態度と技法を習得する」ことであり、演習では講義と連携させて体験学習（15時間）を行い、学生の理解を深めることをねらっている。

演習には構成的グループ・エンカウンターを活用し、毎回4～7人の異なるメンバーになるようにした。演習は1回90分で、オリエンテーション、エクササイズの実施、シェアリング、まとめ、の順に展開される。毎回のエクササイズは、時間内に実施可能なこと、大学生対象であること、心理的抵抗が少なく楽しみの要素があることを考慮して選定した。その内容は、自己の特徴を表現した名刺作成による自己紹介、老人ホームで応募者からボランティアを採用するための話し合

い、対人関係の中の自己点検、日常会話場面を設定したロールプレイなどである<sup>10)11)</sup>。なお、演習中はなるべくリラックスした雰囲気を作り、自己の思考・感情・行動・価値観などに自ら気づき、それを意識化し、気づいたことをグループメンバーに話し、他者に受け入れられる、というプロセスを重視して行った。

### 3. 研究方法

演習の教育効果の検討では、尺度を用いた量的分析、ならびに自由記載内容の質的分析を併用し、学生の意見を反映させるようにした。

#### 1) 選択式調査票によるデータ収集と量的分析

調査には、Rosenberg<sup>12)</sup>が作成し、山本・松井・山成<sup>13)</sup>が邦訳した自尊感情尺度（Self-Esteem Scale）と、沢崎・佐藤<sup>14)</sup>が作成した自己受容尺度（Self-Acceptance Scale）を用いた。自尊感情尺度は質問項目数が10項目で、合計得点は10点から50点の範囲に分布する。項目数が少ないが内容的妥当性が高く、尺度の1次元性が保証されている。10項目について1（あてはまらない）から5（あてはまる）までの5件法で質問し、項目別ならびに合計得点を集計し、演習前後の平均値について統計ソフトSPSSを用いて対応のあるt検定を行った。また、自己受容尺度の質問項目数は26項目で、合計得点は0点から26点の範囲に分布する。尺度の信頼性は全項目で $\alpha=0.82$ と高く、妥当性も確保されている。それがかまわない・あるいは気にならないを1点、それではいやだ・あるいは気になるを0点として加算し、演習前後の平均値について対応のあるt検定を行った。

#### 2) 自由記載式調査票によるデータ収集と質的分析

最終日に、演習に対する感想・意見などについて自由記載用紙を配布した。得られた結果は文章単位でコード化し、比較・分析した。それらを類似する内容毎に分類し、その特徴を表すカテゴリー名をつけた。

### 4. 手続き

対象者には教室で研究目的と方法を説明し、調査票を配布・回収した。その際、調査結果は成績と無関係であることを説明し、選択式調査票は学籍番号のみ記入、自由記載式調査票は番号・氏名とも無記入とした。調査日は、2001年5月1日（演習前）と7月4日（演習後）である。

## 結 果

### 1. 選択式調査票による量的分析の結果

自尊感情尺度の合計得点の平均値は、演習前が30.54 (SD=7.61)、演習後が32.78 (SD=7.76) で、その前後差は2.24 (SD=4.74) であった (表1)。対応のあるt検定を行った結果、演習後に有意な上昇が認められた ( $t=3.20$ ,  $df=45$ ,  $p<0.01$ )。質問項目別にみた平均値の前後差では、3項目において有意差が認められた。即ち、変化の大きい順に、「2. 色々な良い素質をもっている ( $t=3.83$ ,  $df=45$ ,  $p<0.001$ )」、「1. 少なくとも人並みには価値のある人間である ( $t=2.78$ ,  $df=45$ ,  $p<0.01$ )」、「7. だいたいにおいて自分に満足している ( $t=2.57$ ,  $df=45$ ,  $p<0.05$ )」であった。

自己受容尺度の合計得点の平均値は、演習前が18.39 (SD=4.87)、演習後が19.04 (SD=4.58) で、演習後に0.65 (SD=3.30) の上昇がみられた。前後差の平均値について対応のあるt検定を行ったが、有意差は認められなかった。

これらの結果より、演習前後では、自己のありのままの姿を受け入れるという点は変わらず、自己の価値や能力に対する評価が高くなるという変化の有り様が明らかになった。

## 2. 演習に対する自由記載内容の質的分析結果 (表2)

自由記載内容は延べ132件で、一人あたりの平均記載数は2.87件であった。これらをコード化し、各コードを比較しながら類似する内容毎にカテゴリ化し、質的・帰納的に分析した。その結果、最終的に大カテゴリ3項目、カテゴリ8項目、サブカテゴリ20項目が抽出された。以下、カテゴリは [ ]、サブカテゴリは 『 』 で記す。

### 1) 大カテゴリ-A : 学習の成果

学習の成果に関する記述は延べ65件 (49.2%) で、カテゴリ4項目、サブカテゴリ11項目が抽出された。中でも多いカテゴリは [1. 自己理解の促進] (21件, 15.9%) で、そのサブカテゴリは、『自己の振り返り』『自己の受けとめ方や感情の発見』『ありのままの自己の受容』で構成された。次のカテゴリ [2. コミュニケーションの概念の理解] (16件, 12.1%) は、『コミュニケーション概念の体験的理解』『他者理解と自己理解の関連性の理解』『人間の考えや価値観の多様性の実感』というサブカテゴリで構成された。カテゴリ [3. コミュニケーション活用の効果の実感] (12件, 9.1%) は、『自己表現して受けとめてもらえる喜び』『コミュニケーション技法が向上した実感』『自己の内面的成長の実感』のように、コミュニケーションを活用した効果を示していた。以上の3つのカテゴリは、演習の教育目標について実感を伴って理解された内容であり、学習の成果とみなすことができる。一方、カテゴリ [4. 学生間の人間関係の拡大] (16件, 12.1%) は、「知り合いや友人ができた」などのように、教育目標に掲げていないが、学習の深まりに伴って人間関係が培われるという演習の二次的効果であった。

### 2) 大カテゴリ-B : 学習の今後の発展

学習の今後の発展に関する記述は、述べ15件 (11.4%) であった。このうち、カテゴリ [5. 学習成果活用への意欲] を表す『自己成長への意

表1. 自尊感情の演習前後の平均値の差

項 目	演習前		演習後		前後の差		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	検定
1. 少なくとも人並みには、価値のある人間である	3.78	1.03	4.13	0.86	0.35	0.85	**
2. 色々な良い素質をもっている	3.35	1.12	3.80	0.93	0.46	0.81	***
3. 敗北者だと思ふことがよくある	3.28	1.13	3.24	1.37	-0.04	1.38	
4. 物ごとを人並みには、うまくやれる	3.43	0.94	3.52	0.89	0.09	0.89	
5. 自分には、自慢できるところがあまりない	2.80	1.22	3.00	1.19	0.20	1.24	
6. 自分に対して肯定的である	3.02	0.95	3.17	1.06	0.15	1.03	
7. だいたいにおいて、自分に満足している	2.82	1.34	3.28	1.28	0.46	1.21	*
8. もっと自分自身を尊敬できるようになりたい	1.87	1.26	1.96	1.33	0.09	0.78	
9. 自分は全くだめな人間だと思ふことがある	2.80	1.52	3.15	1.51	0.35	1.27	
10. 何かにつけて、自分は役立たない人間だと思ふ	3.37	1.27	3.52	1.26	0.15	1.10	
合 計	30.54	7.61	32.78	7.76	2.24	4.74	**

逆転項目 : 3, 5, 8, 9, 10 SD : 標準偏差

対応のある標本  $n=46$  について平均値の差のt検定 : \*  $p<0.05$  \*\*  $p<0.01$  \*\*\*  $p<0.001$

欲』『コミュニケーション実践への意欲』などの積極的反応は、12件 (9.1%) あった。一方、件数は少ないが、『自己認知の戸惑い』『コミュニケーション実践への不安』など、[6. コミュニケーション活用への不安] を示す消極的反応が3件 (2.3%) あった。

3) 大カテゴリーC：学習形態への反応

学習形態に対する意見は、延べ54件 (39.4%) であった。このうち、構成的グループ・エンカウンターという [7. 新しい学習形態の受け入れ] を示す反応が41件 (31.1%) で、全カテゴリーで最も件数が多かった。その中には、『楽しい、面白い、分かりやすい』など『演習への情緒的反応』が多く、また「今までは知識の詰め込みばかりだったが演習で体験した方がわかりやすい」との反応に代表されるような『演習の有効性の実感』、『自己を見つめる授業への支持』に関する内容が記載されていた。反面、「8. 新しい学習形態への戸惑い」が、11件 (8.3%) あった。これは、「演習の目的や自己の学習成果が分からなくなる」という『学習成果の不確かさへの戸惑い』や、「人前で恥ずかしい・自分のことを話しにくい」など『演習実施への抵抗感』を示すものであった。

考 察

自尊感情の平均得点は一律に決定できないものの、青年の場合は満点に対する62.5%あたりとされ<sup>15)</sup>、臨床実習が行われる2～3年生対象の調査でも同様の結果であったとの報告がある<sup>16)17)</sup>。本研究でも演習前後の平均値は満点に対する61～65%で、先行研究と同様の結果を示した。また、演習前後の自尊感情の平均値については、演習後に2.24上昇し有意差が認められた。併用して行った自由記載内容に演習の有効性を支持する意見が多いことをあわせて考えると、演習が効果的に作用して自尊感情が高まったのではないかと推察される。

他者を尊重する態度は援助者に必要な基本的態度であるが、その前提として、まず援助者自身が自己をありのまま理解し尊重することが必要である。本研究でサブカテゴリーとして抽出された『自己の受けとめ方や感情の発見』や自己の嫌な部分を含めた『ありのままの自己の受容』などは自己理解の促進を示すものであり、また、『他者理解と自己理解の関連性の理解』や『人間の考えや価値観の多様性の実感』などはコミュニケーションに関する基本的概念の理解を示し、いずれも教育効果の一部と考えられる。このような自己を

表2. 演習に対する自由記載内容のカテゴリー一覧

大カテゴリー	カテゴリー	サブ・カテゴリー	件数 (%)	
A. 学習の成果	1. 自己理解の促進	1) 自己の振り返り	5	21
		2) 自己の受けとめ方や感情の発見	15	
		3) ありのままの自己の受容	1	
	2. コミュニケーションの概念の理解	1) コミュニケーションの概念の体験的理解	7	16
		2) 他者理解と自己理解の関連性の理解	5	
		3) 人間の考えや価値観の多様性の実感	4	
	3. コミュニケーション活用の効果の実感	1) 自己表現して受けとめてもらえる喜び	5	12
		2) コミュニケーション技法が向上した実感	5	
		3) 自己の内面的成長の実感	2	
	4. 学生間の人間関係の拡大	1) 知らない人との出会い	12	16
		2) 友人関係の形成	4	
	B. 学習の今後の発展	5. 学習成果活用への意欲	1) 自己成長への意欲	7
2) コミュニケーション実践への意欲			5	
6. コミュニケーション活用への不安		1) 自己認知の戸惑い	2	3
		2) コミュニケーション実践への不安	1	
C. 学習形態への反応	7. 新しい学習形態の受け入れ	1) 自己を見つめる授業への支持	9	41
		2) 演習の有効性の実感	5	
		3) 演習への情緒的反応	27	
	8. 新しい学習形態への戸惑い	1) 学習成果の不確かさへの戸惑い	7	11
		2) 演習実施への抵抗感	4	

(のべ 132 件)

みつめる学習は早期から段階的に行われることが望ましいが、個人の私的な内面的世界に関わるため、学生の不安や緊張が大きくなり心理的安全が脅かされる危険性も含んでいる。この点については、構成的グループ・エンカウンターは教官がリーダーとなって参加者の心理的安全を保ちながら授業を構成できるため、また、対象に応じたエクササイズを選定することで初学者にも受け入れやすいため、効果的に作用したといえよう。そして、その後に関講される専門科目において、段階的に学習を進展させることが可能となる。

コミュニケーションの学習で、他者を理解し受け入れること（他者に理解され受け入れられること）の意味を学ぶためには、他者との相互作用による体験学習が効果的である。特に、本研究で抽出された『自己表現して受けとめてもらえる喜び』などは、自己について勇気をもって他者に話して受け入れられた時の安心感や他者に理解されることの喜びの実感を示しており、将来他者を援助する立場になる学生にとって貴重な学習経験になると思われる。

また、構成的グループ・エンカウンターについては、自由記載内容にその楽しさや分りやすさを示す『演習への情緒的反応』『演習の有効性の実感』や『自己をみつめる授業への支持』など、新しい学習形態を受け入れる反応が多くみられ、同時に学習の成果も認められたことから、教育方法として効果があると考えられる。これについては、大学入学まで主に講義や教科書から知識を得るという受動的・個人的学習が中心であった多くの新入学生にとって、グループメンバーとの相互理解を深めながら学ぶという方法が新鮮であり、また、自己理解という学習内容がアイデンティティの発達課題をもつ青年期の学習ニーズとも関連して、興味をもって学べたのではないかと推察される。

しかし、少数ではあるが、新しい学習形態に対する戸惑いや抵抗もあった。例えば、「何を学んだか分からない」「何を学べばいいか分からない」などは、自己の内面の意識化や洞察を深めることに不慣れなために、『学習成果の不確かさへの戸惑い』として表れたものであり、この点については、説明で補ったり洞察を支援する必要がある。また、わずかだが「自分のことを話すのは抵抗がある」のように、自己開示を伴う『演習実施への抵抗感』もあった。自己開示とは、自己について「ありのまま、相手に隠すことなく、誠実に、相手にわかるように、人に強制されることなく、積極的・自発的に伝えること」<sup>18)</sup>である。抵抗については、開示内容に対する相手の評価への不安や、自己表現力への不安から生じると考えられるため<sup>19)</sup>、本演

習においても、より自己開示しやすい雰囲気を作るとともに、個人に無理のない開示レベルで演習できるように配慮して慎重に関わる必要がある。

## 結 論

構成的グループ・エンカウンターを用いた演習の教育効果について、量的・質的に分析し、次の結果が得られた。

1. 演習前に比較し、演習後の自尊感情が1%水準で有意に高まった。
2. 演習に対する反応では、次のカテゴリーが抽出された。
  - A. 学習の成果（自己理解の促進、コミュニケーションの概念の理解、コミュニケーション活用の効果の実感、学生間の人間関係の拡大）
  - B. 学習の今後の発展（学習成果活用への意欲、コミュニケーション活用への不安）
  - C. 新しい学習形態に対する反応（受け入れ、戸惑い）

以上より、構成的グループ・エンカウンターを導入した演習の教育効果が明らかになり、学生の戸惑いや抵抗にどう関わるかが今後の課題になった。

本調査にご協力いただいた皆様に深く感謝いたします。

## 文 献

- 1) 見藤隆子：看護教育へのエンカウンターグループの導入、看護教育、27(4)、245-250、1986。
- 2) 鈴木正子：エンカウンターグループ法の応用による自己実現をめざした授業の試み、埼玉県立衛生短期大学紀要、第10号、20-27、1985。
- 3) 広瀬寛子：看護学教育における集中的グループ体験のもつ教育的機能に関する研究、看護研究、23(5)、57-67、1990。
- 4) 石川みち子：看護教育におけるグループ・エンカウターの応用とその効果に関する研究（その1）、千葉県立衛生短期大学紀要、11(2)、65-80、1992。
- 5) 石川みち子：看護教育におけるグループ・エンカウターの応用とその効果に関する研究（その2）、千葉県立衛生短期大学紀要、12(2)、71-86、1993。
- 6) 山崎洋子・鳴海喜代子・遠藤英子：看護学生の自尊感情（Self-Esteem）の変化について、帝京平成短期大学紀要、第4号、15-19、1994。
- 7) 手島茂樹：体験にもとづく構成法・非構成法の比

- 較, 国分康孝編, 構成的グループ・エンカウンター, 337-344, 誠信書房, 1992.
- 8) 清水幹夫: 構成法と非構成法の異同, 国分康孝編, 構成的グループ・エンカウンター, 345-355, 誠信書房, 1992.
- 9) 国分康孝編著: 構成的グループ・エンカウンター, 誠信書房, 1992.
- 10) 奥野茂代・池田紀子・石川みち子: ナースのための自己啓発ゲーム, 医学書院, 1998.
- 11) 日本精神技術研究所編: 実践カウンセリングワークブック, 金子書房, 1992.
- 12) Rosenberg, Morris: Society and the adolescent self-image, Princeton University Press, 1965.
- 13) 山本真理子・松井 豊・山成由紀子: 認知された自己の諸側面の構造, 教育心理学研究, 30, 64-68, 1982.
- 14) 沢崎達夫・佐藤純子: 大学生の自己受容測定尺度作成の試み, 日本教育心理学会第26回総会発表論文集, 366-367, 1984.
- 15) 菅佐和子: S E (Self-Esteem) について, 看護研究, 17 (2), 21-27, 1984.
- 16) 山崎洋子・鳴海喜代子・遠藤英子: 前掲書 6)
- 17) 川口優子: 看護学部学生のソーシャルサポートと自尊感情, 北里看護会誌, 1 (1), 6-10, 1992.
- 18) 遠藤公久: 構成的グループ・エンカウンターにおける自己開示の意義と条件, 国分康孝編, 続 構成的グループ・エンカウンター, 21-29, 誠信書房, 2000.
- 19) 遠藤公久: 前掲書 18)

(受付 2001年10月26日)